

踊る技術の習熟と動きの体感に関する一考察

大阪女学院短期大学
神戸大学
天理大学

原田 純子
柴 真理子
塚本 順子

1. 研究目的

舞踊を踊る際、踊る者に様々な体感が生起することは先の研究にて明らかである(柴・1997)。また、舞踊経験者と舞踊未経験者との比較では、経験者の方が舞踊運動の体感が明確であることが導かれた(柴・2003)が、踊る技術の習熟と体感の関連は未だ充分に解明されていない。そこで今回は、舞踊運動の繰り返し練習による踊る技術の変化と体感の変化をみることから、両者の関連を明らかにすることを目的とした。

2. 研究方法

被験者が踊った舞踊運動と、その時に体感した感情語(5語以内の自由記述)の記録より、踊る技術の習熟と体感の変化の関連をみた。

2.1. 実験材料の舞踊運動の設定

柴らによる先行研究¹⁾にて作成された31種類の舞踊運動から、舞踊経験の浅い被験者が取り組みやすいと考えられる2種類(舞1:「大きい」=身体を大きく伸び伸びと使う踊り、舞2:「楽しい」=スキップとジャンプにより身体が上下に弾む踊り)を実験材料の舞踊運動として選択した。

2.2. 被験者および舞踊運動の練習と収録

被験者は、神戸大学発達科学部舞踊系運動方法論実習の受講生で、実習を既に履修している。実験は、2002年10月10日～11月7日に体育館での授業の中で実施した。練習と収録は以下の表に示す日程で行なった。

舞踊運動	週				被験者数 (女性数)
	①	②	③	④	
舞1	●	●	●		15 (5)
舞2		●	●	●	14 (5)

3. 結果および考察

3.1. 踊る技術の評価

“運動がひとつの流れをもって、舞踊運動としてつながっていること”を基準(3点)とし、5段階で評価した。評価はビデオを見て舞踊研究者4名の合議で行なった。その結果、舞1では1から3回目で評点が下がった被験者は1名のみで、その他は0.5～2点の上昇が見られた。とくに、動きと動きの繋がりがスムーズになる点に習熟を捉えることができ、全体として、「伸び伸びと大きく」という質感は表現性を伴って舞踊運動の中によく現れていた。同様に舞2では、2から3回

目の評点の伸びが低く、3回目で基準点の3を超えた者は5名のみであった。その原因として腕と足の運動が困難であったことが推察される。後半のジャンプのリズムのとり方を習得している者は2名であり、全体的に、運動そのものの練習が3回では充分でないと考えられる。

3.2. 感情語にみる体感の変化

舞1の運動後に得られた感情語は1回目=38語、2回目=28語、3回目=45語、舞2ではそれぞれ27語、40語、42語であった。これらを統計的に処理し、コレスポネンス分析によって、感情語と舞踊運動の近さを表わしたのが図1(舞1)と図2(舞2)である。統計処理には、SPSS11.5J、Categoriesを用いた。

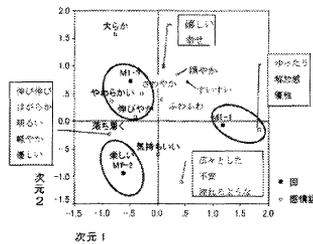


図1 舞踊運動1と感情語の親近性

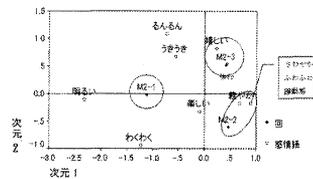


図2 舞踊運動2と感情語の親近性

舞1では、1回目は「大きい」「ゆったりとした」、2回目は「楽しい」、3回目は「伸びやかな」「大らかな」という感情語がそれぞれ近くにあり、設定者が想定した「大きい」感じは、3回の練習を通してだまかに捉えられている。

舞2ではいずれの回も被験者の3分の2が「楽しい」感じを捉えてはいるのだが、1回目は

他に特徴的に体感された感情語がない。これは舞踊運動自体が難しく、動きを十分に習得できていないために、体感が単調になったのではないかと考えられる。

4. まとめ

以上の結果より、踊る技術の向上は体感の深まりと広がりを助けるという相互関係が考えられる。しかし、舞踊運動2のように被験者にとって習得が難しい場合は、さらに練習を積み重ね、まずは流れをもってスムーズに踊れるようになることが、体感の深まりと広がりを保証すると推察される。また逆に、体感が豊かになることで、踊る技術がさらに向上するであろうことは、検証すべき今後の研究課題である。

【参考文献】

- 柴真理子他「異なる感性表現に共通する基本感情の検証と異文化間比較」(平成12年度～14年度科学研究費補助金, 基盤研究C報告書)